

## 日本語教育用 AV リソース公開サイト「mic-j」について<sup>1</sup>

<http://japanese.human.metro-u.ac.jp/mic-j/>

西郡 仁朗

### 要 約

日本語教育用の教材・素材を公開している WEB サイトを調査した結果、初級後半から中級・上級に至る段階で教育的配慮のある素材、特に音声・動画の不足が目立った。本サイトはこの問題の解決の一助となるべく開設されたものであり、現在「中級聴解」「擬態語」「自動詞・他動詞」「写真集」などの素材を公開している。

マルチメディア支援による日本語教育の充実のためには、こうした公開素材の充実とともに、教育関係者自身が「メディアを統合」し、「インターラクティブな」教材を「編集・拡張」していく技術を習得していく必要がある。

### 1. マルチメディア支援による日本語教育の必要性とその発展のための条件

ここ数十年、国内外の日本語学習者は増加し続けている。全世界の日本語学習者は 1979 年に 13 万人であったものが、1998 年には 210 万人に達している（1999 年国際交流基金による調査<sup>2</sup>）。バブル経済崩壊以降に絞っても学習者の増加は続いており、例えば、日本語能力を測定する最大規模の試験である『日本語能力試験』の受験者数は、1995 年の約 8 万 8 千人から 2000 年には約 20 万人と 2 倍以上の伸びを見せ（2001 年日本国際教育協会による調査<sup>3</sup>）、日本経済が不況であるといっても、日本語に対する潜在的なニーズはかなり高いことが伺える。また、単純に数が伸びているだけでなく、学習者の多様化も進んでいる。1980 年代までは日本語学習者のモデルとして日本在住の留学生・就学生を想定しておけばさほど問題なかったが、現在は国内だけでも技術研修生・中国帰国者・日系ブラジル人・ビジネスマン等々の人々とその子どもたちと、学習者の背景がさまざまになってきており、また、彼等の母語・文化も多様性に富んでいる。これに海外での学習者が加わり、シラバスやカリキュラムには多様で柔軟なものが求められるようになってきている。学習者の背景別、母語別、技能別の教材が市販されるようになってきてはいるが、日本語学習者が増加しているとはいってもそのマーケットは巨大なものではなく、対象学習者を絞れば絞るほど市販しにくいという状況がある。

筆者が指摘したように(NISHIGORI, 2001) マルチメディア支援による日本語教育には、さまざまな利点があり、上記のような学習者の増加と多様化をメディアの面か

ら支えていくものとなる。マルチメディア支援による日本語教育の利点は次の三点にまとめられよう。

第一の利点は「メディアの統合」である。マルチメディアは、文字・音声・静止画や動画など様々なメディアの情報を圧縮して取り入れ、融合・統合し、一元的に提示・管理することができる。現実のコミュニケーションを最終目標とする語学教育では、提示される教材が（教室活動であるか自学自習であるかを問わず）現実に近いほど有効になるし、動画を見ながら文法解説のテキストデータを見るなどと言うメタ認知を伴う学習が可能になる。

第二の利点は「学習者とメディアとの双方向的な(インタラクティブな)関わり」である。マルチメディアではコンピュータと学習者のやり取りが比較的自由にでき、学習者が一人称で（自分自身として）臨場感を感じながら、コミュニケーション場面等での問題解決、ロールプレイ、ゲームなどに関わることが可能である。

第三の利点は「編集・拡張の可能性」である。教科書等の印刷物では一つの単元の学習資料が後続の単元を学ぶ基礎となり、やさしい内容から難しい内容へと積み上げられていく直線的・階層的構造がとられている。しかし、マルチメディアによる教育では、あらかじめ準備された剛構造はない。メディアを扱う学習者や教師が、自らの必要に応じて能動的に学習資料を構造化したり内容の編集・拡張等を行ったりすることができる。つまりカスタマイズできる。また、学習状況を記録したり、教師・学習者がコメントを付加したりすることができる。

こうした特長は、先述の通り、多様な学習者の個別的な学習や、能動的な学習をメディアの面から支えるものとなるだろうが、それには二つの条件がある。

一つは、日本語の指導に当たる者が、教室活動の技能や日本語教師としての背景知識を持つと同時に、マルチメディアの操作が可能になっていることである。このような語学教育者に対するメディア操作熟練の社会的要請は日本に限ったことではない。例えば、アメリカ合衆国の大学では語学教育者のための博士課程の設立が相次いでいるが、その中の一つアイオワ大学の FLARE プログラム (Foreign Language Acquisition, Research, and Education) では、研究分野の三本柱を、1. SLA 言語学 (SLA-Linguistics)、2. SLA プログラム策定 (SLA-Programmatic)、3. SLA 教育工学 (SLA-Technology) としており、教育工学・マルチメディアの利用が非常に強調されている (西郡, 2001)。

日本語教育者のマルチメディア利用の現状について明確な資料はないが、筆者の

大学・大学院や学会の研修での日本語教育関係者に対するコンピュータリテラシーの経験からいうと、受講生の多くは受講前にワープロとメール・ブラウザのアプリケーションを使用している程度であった。週一回半年の講習を受ければ、ワープロやプレゼンテーションソフトで「メディアの統合」の技能はある程度習得することはできるが、「インターラクティブ」「編集・拡張」の技能まで高めていくのは難しい。「インターラクティブ」「編集・拡張」のためにはプログラミングが必要であるが、VisualBasic, HyperCard, Java, C++ といった開発言語となると、多くが「文科系」出身の日本語教育関係者には、どうしても向き不向きが出てくる。筆者の直観であるが「インターラクティブ」「編集・拡張」にまで進める日本語教師（またはその卵）の確率は十人にひとりといったところであろうか。現在日本の高校で展開されている「情報」科目を履修した人材が日本語教育に入って、この確率が急上昇することを期待したい。

もうひとつの条件は、インターネット上で様々な情報、特に視聴覚系のファイルが入手可能であることである。WEB サイトには実に様々な情報があるが、日本語教育で実際に利用可能なものはどの程度あるのであろうか。それを探るために以下の調査を行った。

## 2. WEB で公開されている AV リソースの状況 (2000 年 8 月の段階)

2000 年 8 月、一般の検索エンジン上で「日本語教育」「日本語学習」などをキーワードとしてサイトを検索し、その中で自学自習または教育支援が行われている 97 のサイトからなるリストを作成した（無料のものに限った。ダウンロードして使用するものも含める。また、一つの WEB サイトが明らかに異なる複数の内容を含んでいる場合には別のものとして項目化した。稿末資料参照）。次に、個々のサイトについて、音声・動画が付いているか（動画には Flash, ShockWave 等は含めない）、学習段階、学習できる言語技能等を筆者が分析した。これは網羅的な調査ではないが、2000 年 8 月の段階での大まかな傾向を見ることができたと思われる。

国内の日本語教育で学習・教育の段階を「初級」「中級」「上級」などに位置づける際、日本語能力試験を基準にすることが多い。一般に、3 級受験レベルまでが初級、2 級受験レベルまでが中級、1 級受験レベルまでが上級とされる。この調査でも、サイトで扱われている語彙や文法項目を点検し『日本語能力試験-出題基準』（1994）

を参照して初級・中級・上級の段階付けを試みた。また、上級を明らかに越えるレベルのものは「超上級」と呼ぶことにする。表1にその概要を示すが、サイトの中には初級・中級・上級・超上級すべての段階での読解技能の習得支援を目的とするものなどもある。これらについては複数のレベルでカウントし、延べ数となっている。

予想されたことではあるが、表-1を見ると、初級レベルの内容が多い。初級者レベルの音声付きのサイトは、文字（ひらがな、カタカナ、初級漢字）の読み方、単語、挨拶ことば、サバイバル用定型句を扱ったものが大部分であり、動画付きのものは文字の筆順を実写で示したものが多かった。中級・上級レベルはサイト数も限られており、マルチメディアを利用した日本語教育に利用可能な資料は非常に少ない。超上級レベルも見ると中級・上級と同じ状況なのであるが、このレベルに達している学習者には、放送局などを初めとする一般サイトの「生の」素材が十分利用可能であり、インターネット上の資料を利用したマルチメディア支援による日本語教育・学習も可能であると思われる。

表-1. 日本語学習支援サイトの分類 (2000年8月調査)

レベル	サイト数	音声付サイト数	動画付サイト数
初級	75	33	12
中級	30	3	3
上級	32	1	1
超上級	23	1	1

既述の通り、今回の調査は網羅的なものではないし、調査時点から現在（2002年2月）に至る間に生まれた新しいサイトや内容が強化されたサイト（代表的なものでは文化庁や海外技術者研修協会の初級レベルでの資料公開）もあるだろう。限られた範囲からの分析ではあるが、筆者が一番の問題点だと感じるのは初級の後半から中級、そして上級に至る公開資料の不足である。日本語教育・研究機関、あるいは個人が、インターネットで資料を公開する場合、最初に手がつけられるのは、ひらがな・カタカナの書き方・読み方、挨拶ことば等々の初級入門レベルの内容であろう。これは日本語教育の研修や教育を受けたことがない素人にも可能かもしれない。また、WEB公開者が外国語に堪能である場合、日本の文物・文化を外国語で紹介することも考えら

れる。こうした資料はインターネット上で自然に増加していくであろうし、音声・動画資料をデジタル化し WEB に載せることが容易になっていく中、ますます進展していくと思われる。また、超上級者向けの生の素材も一般サイト上で間違いなく増えて行くであろう。しかし、初級後半から中級、上級については自然に勢いづくとは思えない。こうした素材は、学習者・教育者にとって、入門レベル、サバイバル・レベルの日本語から本当のコミュニケーションへとつなげていく非常に重要なものなのではあるが、誰にでも制作できるものではないからである。そこには、語彙や文型に関する統制を考えながら、自然な日本語コミュニケーションになるような教育的配慮が必要である。制作者には日本語教育に関する素養が必要であり、同時にインターネット上で公開するための技能が求められる。日本語教育界に属する筆者の実感からいうと、こうした人材は今のところ非常に限られており、制作物を無料で外部公開となると人数はさらに少なくなる。可能性があるのは、大学・大学院の教材・教具論の実習として制作されたものの公開や、研究プロジェクトの成果物公開などではないだろうかと思われる。事実、今回の調査でも、前者については名古屋大学、後者としてはアメリカ・パデュー大学や岩手大学などのサイトがあった。

これまで述べてきたように、筆者のいう日本語教育関係者自身によるマルチメディア教材の自作のためには、利用可能な初級後半から中級、上級に至る公開素材の充実と、日本語教師自身のマルチメディア操作技能の習得が不可欠であり、これは急を要する課題であると思われる。

### 3. mic-j での AV リソースの公開

前章までに示してきたように WEB 上で公開されている AV 資料、特に初級後半から中級、上級に至るものは非常に限られている。この一助となるべく、筆者が管理人となって、実際の日本語教育で使用可能な素材の公開を開始した(図-1 参照)。

URL は <http://japanese.human.metro-u.ac.jp/mic-j>

ミラーサイトは <http://www.naganuma-school.or.jp/mic-j> である。

現在までに公開されているのは、東京都立大学及び言語文化研究所においてスタンダードアローン型で用いられてきた素材(西郡, 1999、言語文化研究所, 1999)の一部を WEB で使用できるように改編したもの、東京都立大学及び大学院、早稲田大学大学院、

日本語教育学会の現職日本語教師に対する講習会、ラボ日本語教育研修コースなどでのプロジェクトワークとして新たに制作されたものである。

現在のところ動画と音声の配布については、ともに QuickTime Movie ファイル、静止画については JPEG ファイルを採用している。また、海外の日本語フォントのないマシンでの使用も考慮し、日本語による説明等では一部テキストデータとイメージファイルを併用している（海外の日本語教育機関では、OS として非日本語の Windows95 が相当数使われており、日本語フォントを装備していないことが多い）。

**Multimedia-supported \* Interactive \* Communicative \* Japanese**  
**mic-J 日本語教育AVリソース**

ENGLISH

CHINESE

KOREAN



mic-Jの動画・音声の再生には QuickTimeが必要です。



QuickTime  
FreeDownloadSite

このサイトの素材は 著作権を主張していません。教育目的であれば自由にお使いいただいてかまいません。ただし、どこで使用しているか、どんな目的で使用しているか、素材の問題点などを管理人にお伝えいただければ幸いです。商用目的の使用は禁止します。（最終更新日：2002年2月7日）

サーバへのアクセス数 **3 6 3 0 9** | 1999年4月12日以降（カウンター提供digits.com）

管理人： 西郡 仁朗 NISHIGORI Jiro (東京郵立大学) [jirrom@comp.metro-u.ac.jp](mailto:jirrom@comp.metro-u.ac.jp)  
 坂本かおる FUJIMOTO Kaoru (言語文化研究所) [fujimoto@naganuma-school.or.jp](mailto:fujimoto@naganuma-school.or.jp)

---

**中級聴解**

**擬態語**

**自動詞・他動詞**

**写真集**

**敬語**

**自然会話データ**

日本語能力試験2級レベルの聴解問題です。音声ファイルとテキストデータが入っています。

擬態語についての動画・音声・説明と例文、英語・中国語・韓国語訳がついています。

自動詞と他動詞の対立のあることばを、動画と音声で紹介します。言語文化研究所提供。

日本語の教材を作るときに便利な写真とキーワードが載っています。

相手・場面・話題の人物によって変わる敬語表現の動画とスクリプトです。『敬語表現』（齋谷・川口・坂本著）準拠。工事中

初対面会話のデータと分析方法です。JapaneseOnly

図-1. mic-J 日本語教育リソース・トップページ

## 2-1. 中級聴解 (2002年2月現在 62問)

聴解行動・日本語コミュニケーションの特徴、語彙と文型の統制などを踏まえて制作された。一応のモデルとしたのは日本語能力試験であり、通常「中級」といわれる2級レベル相当となるよう配慮した。この試験では、日本語学習者が出会う日常生活の中で解決を求められる聴解の課題を想定してそれを遂行する能力を試験という場でいかに測るかが課題となっており、問題として備えているべき特徴として、「1. 学習者が教室を含めた日常生活で出会う課題と同様の課題を解決する。2. 情報の正確な聞き取りに留まらず、聞いて何かをすること、つまり広い意味での問題解決を求めるもの」であることとなっている(『日本語能力試験出題基準』, 1994)。

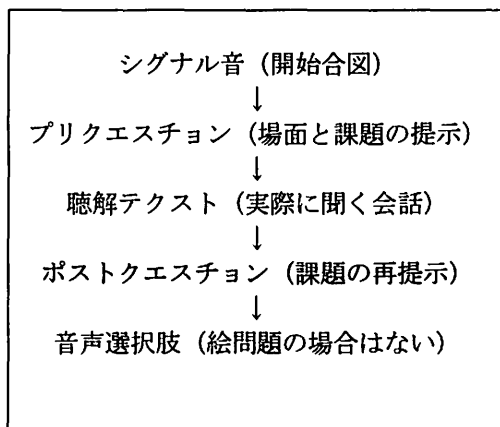
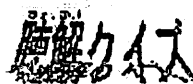
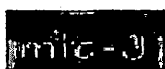


図-2. 中級聴解 一問の流れ

今回制作した聴解問題でも基本的な考え方はこれになった。文型や語彙の能力をもとに情報を正確に聞き取る能力は「必要だ」がそれだけで「十分」ではなく、場合によっては、不必要な細部にこだわらず、重要な部分に焦点を当てて聞くなどの聞きのためのストラテジーを駆使する能力や、情報を整理し、あるいは処理することによって一定の判断や想像あるいは推理、さらには仮説の設定、検証、修正などの問題解決のための知的な作業を行う能力が求められる内容となっている。

一つの問題の構成は図-2 に示した通りである。制作に当たって具体的に留意した点を以下に列挙する。

1. オリジナル問題であること。
2. 差別語 (性・人種・職業・身分・身体障害)、差別的内容を含まないこと。


[mic-J TopPage](#)
[SOUNDLISTEN](#)
[Listening Quiz TopPage](#)

「待ち合わせ」作：津花知子（早稲田大学）  
男の人と女の人が話をしています。2人は何時に会いますか。

男：コンサートが始まるのは7時半だから、いつもと同じ時間でいいよね。  
女：うん。じゃあ、7時に改札ね。あ、でも、コンサートが終わるのが9時すぎだから、その前にご飯を食べない？  
男：そうだね。じゃあ、6時にしようか。  
女：じゃあ、6時に改札ね。  
男：あ、だめだ。その日は6時半まで会議があるんだった。  
女：そうか、じゃあ、先に食事をするのは無理ね。  
男：悪い。コンサートの後においしい物をごちそうするからさ。  
女：OK。じゃあ、いつも通りね。

2人は何時に会いますか。

- 1 6時に会います。
- 2 6時半に会います。
- 3 7時に会います。
- 4 7時半に会います。

正しい答え：3

声：尾崎和香子・森本かおる（言語文化研究所）西郡仁朗（東京都立大学）  
録音：岩田之男（言語文化研究所）2001年11月制作

### 図-3. 「中級聴解」問題例

3. はじめに場面と課題を提示して、認知的なトップダウン型処理を促し、課題解決型の現実の聴解行動に近づけること。
4. 回答者が登場人物の一人に自分を投影できるもの（盗み聞きでないもの）。
5. 言語ノイズを除き中級語彙（日本語能力試験2級）の範囲内であること。
6. 内容が非現実的なものや、必然性のないものは避ける。
7. 特定の政治観・宗教観に依拠したものは避ける。
8. 記憶力や計算能力など、聴解力以外の能力に大きく依存したものは避ける。
9. 原則的に一問1分以内であること。
10. 場面設定が長すぎるものは避ける。
11. 問題を聞かなくても常識で答えられるものではないこと。
12. 固有名詞が多くないこと（記憶負担軽減の意味もある）。



13. 特定の知識がないと答えられないもの、また知識があるかないかによって理解に差が出るものは避ける
14. 学習者の母語、男女、年齢による理解の差がでないもの。
15. 日本語音声聞き分けだけのものは避ける。
16. 登場人物の数は4人以下で、声質による人物の同定が容易であること。
17. 正解が曖昧になりやすいものは避ける。
18. 話し言葉の特徴（文が短くターンが多い、倒置・繰り返し・言い換え・体言止めが多い・イントネーションによる発話意図の伝達等）が含まれること（ただし、声のオーバーラップは、話し言葉にはよく見られるが、録音素材としては著しく聞きにくくなるため用いない）
19. 発話のはじめの摩擦・破擦系の音は聞き取りにくいので避ける。または、「あろう」「ねえ」「すみません」の挿入などでカバーする。

図-3 に聴解問題の例を示す。

## 2-2. 擬態語（2002年2月現在26語）

外国人にとって日本語のオノマトペ（擬声語・擬態語）は学びにくく、翻訳しにくいとよく指摘される（荒木, 1994 など）。また、学習者からも「感じ」がつかめないという感想をよく聞く。例えば「笑う」という動詞に「にこにこ」「にやにや」「くすくす」「げらげら」が副詞として添えられて、様々な笑い方やニュアンスを伝えることができる。これについて「英語では、*laugh* のほかに、*grin*, *smile*, *giggle*, *guffaw* などいろいろな動詞があり、副詞（擬態語）ではなく、動詞の方に意味の多様性の機能を担わせているのであり、人間の感じ方にそれほど差があるわけではない」（浅野, 1982）という考え方もある。しかし、日本語の擬態語は日本語話者の情動や心象を直接ことばにしているという感覚があって、時には新たな擬態語を造語することすらでき、ことばとその指示対象の関係の恣意性・類縁性に関わるものではなかろうか。一語一義を概念化の原則とする印欧語に対し、日本語には対象世界を漠然としたまま、感覚的・情動的に切り取る面があり、それが端的に現れているのが擬態語ではないかと考える。外国人にとって擬態語の学習が難しいのは、こうした日本語の本質と関わる部分と関係があり、感覚的・情動的な面の理解が難しいためではないだろうか。そのため、擬態語の直感的な理解を促す第一歩として動画素材作りが行われた。

表-2. mic-jの擬態語リスト (2002年2月現在)

うとうと	うろうろ	ぎりぎり	ぐいぐい	ぐうぐう
くすくす	ぐちゃぐちゃ	ぎゅうぎゅう	ぐらぐら	げらげら
しくしく	すたすた	ずたずた	ちびちび	にこにこ
ねばねば	のろのろ	はきはき	ばらばら	ぴよんぴよん
ふらふら	べたべた	ぼさぼさ	ぼそぼそ	ぼろぼろ
わんわん				

**ねばねば**

NEBANEBA                      ねばねば                      ねばねば

mic-J TopPage

擬態語                      GITAIGO TopPage

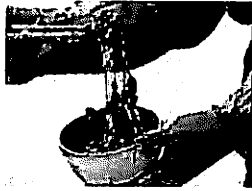
Japanese Onomatopoeia in Japanese, English, Chinese, and Korean

Japanese (image)

「ねばねば」は、よく粘って、ものにつきやすい様子のことです。

文例

1. 納豆をかき混ぜるとねばねばする。
2. この木の樹脂は大変ねばねばしている。



1994年度『言語表現法』受賞者有志作成  
(東京都立大学)

English

*Neba Neba* describes something that is gooey that readily sticks to other things.

Example Sentences

1. When one stirs natto, it is gooey.
2. The resin of this tree is very sticky.

Japanese (text)

「ねばねば」は、よく粘って、ものにつきやすい様子のことです。

文例

1. 納豆をかき混ぜるとねばねばする。
2. この木の樹脂は大変ねばねばしている。

Chinese

表示粘乎乎的，很粘的样子。

例：

1. 纳豆一搅就粘乎乎的。
2. 这个树脂粘度很大。

Korean

[nebaneba]는 꽤 끈기가 있어 달라붙기 쉬운 모양을 말합니다.

예문

1. 메주콩을 휘저어 뒤섞으면 끈기가 생긴다.
2. 이 나무의 수지는 몹시 끈적끈적하다.

図-4. mic-j 「擬態語」の素材例

WEB に掲載している擬態語は表-2 に示した語である。日本語教育学関係の学部生のプロジェクトワークとして、動画と音声を作成し、さらに、各種辞書の記述と議論を

もとにした説明と例文、その英語・中国語・韓国語訳を制作した。素材の大部分は、すでに制作されていたものであり、スタンドアローンのコンピュータで東京都立大学の日本語学習者に教材として提供していたが（西郡，1999 参照）、今回 WEB に載せて学内外で広く使用できるようにした。

無論この素材集だけで擬態語学習が完結するとは考えていない。この素材集は擬態語の表面的な部分を紹介するに留まっており、文例も少なく、先述の言語の恣意性に関わる点や、他のことばとの共起制限は深く扱っていない。が、日本語教育者が教室活動に利用でき、自学自習の一助にもなるのではないかと期待している（図-4 参照）。

### 2-3. 自動詞・他動詞（2002年2月現在 42 スキット）

日本語の自動詞と他動詞の区別（自他の対応のあるもの）も外国人学習者には難しい項目である。世界の多くの言語には自他動詞の対立があるが、日本語の場合、似て非なる語形でこの区別を表しているところが混乱を生む主因であろう。英語や中国語にも自他の対立はあるが、多くの場合、同一語形で自動詞・他動詞の両方を表すので文脈で判断できる。しかし、日本語の場合は、自他動詞の語形の違いは多岐にわたり、統一規則や文脈で判断するのが非常に難しい。例えば（参考：奥津，1982）、

- a. 「乾く」→「乾かす」，「似る」→「似せる」は自動詞に他動接尾辞(s 音が伴う)を付けて他動詞化する。
- b. 「分ける」→「分かれる」，「挟む」→「挟める」などは自動詞に他動接尾辞(r 音が伴う)を付けて自動詞化する。
- c. 「直る」と「直す」，「流れる」「流す」などは自他に対して中立的な語幹に自動接尾辞(r 音を伴う)または他動接尾辞(s 音を伴う)を付ける。
- d. 「並ぶ」と「並べる」，「解ける」と「解く」は、接尾辞によるものではないが五段活用と一段活用の対応がある（ただし、両動詞対の間で自他の活用の関係は逆になっている）。
- e. 「増す」や「閉じる」などは、自・他同形である。

などと分類することは可能であろうが、日本語学習者がこうした分類規則を覚え、動詞を使用したいときに正しいものを選択するように指導するのは不可能であろうしナセンスである。語尾に s 音が伴う場合には他動詞の場合が多く、r 音が伴う場合には自動詞の場合が多いという程度のヒントまでは言えるが、結局は個々の動詞が自動

詞であるのか他動詞であるのかを覚えていくしかない。

自動詞と他動詞の導入は、多くの場合初級後半に行われるが、始めにしっかりした記憶定着がないと、上級や超上級になっても混同している場合が多い。

各日本語教育機関では、自他動詞についてさまざまな導入法が試みられているが、本WEBでは、その中の一つ、言語文化研究所制作のCD-ROM教材『日本語玉手箱』（1999）収録の自動詞・他動詞のビデオスキットの一部分を公開する<sup>4</sup>。この教材では、動作を表す動画をもとにして自他の動詞の違いを導入し、短編のドラマを通じて豊富な練習ができる。教材設計も学習者とメディアのインターラクティブリティがとられたものになっている。WEBで公開するのはごく一部で、導入用動画の部分だけである。対立のある自動詞と他動詞を並列提示し、動画を用いて概念を伝え、その音声と文字表記を覚えること、つまり弁別学習と連合学習、動画による直接指示により記憶を効率的に行おうとするものである（下記図-5参照）。対象となる自動詞と他動詞は「あける／あく」「だす／でる」「いれる／はいる」「けす／きえる」「ならべる／ならぶ」「しめる／しまる」「つける／つく」の7対14動詞で、それぞれの動詞を示す動作や状況のビデオスキット42からなっている。

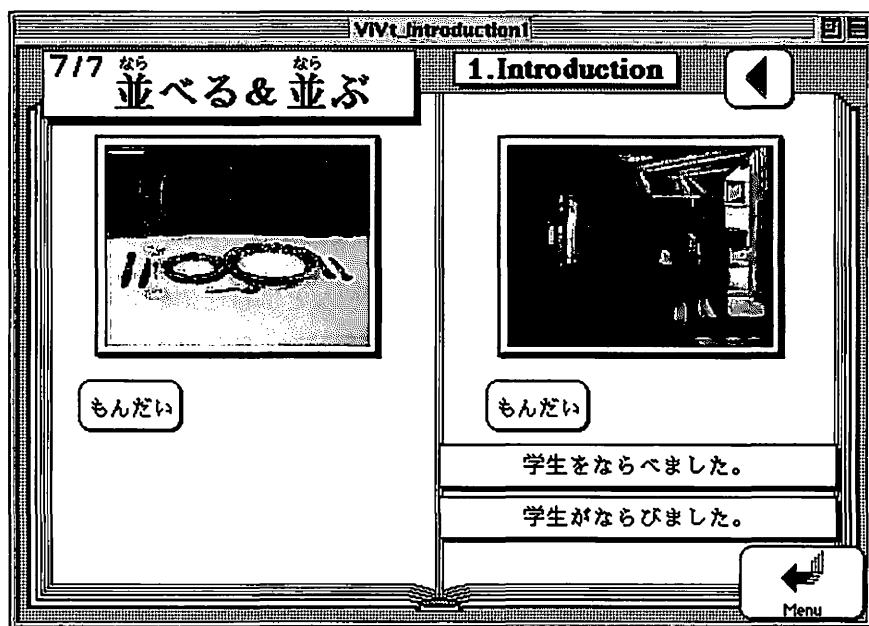


図-5. 自動詞と他動詞のビデオスキット（『日本語玉手箱』より）

## 2-4. 写真集 (2002年2月現在 230枚)

国際交流基金制作の『日本語教育用写真パネルバンク CD-ROM 版(2000)』は、内容が豊富で、写真も美しく、日本語指導のみならず日本文化・日本事情教育用に広く用いられ世界的に好評を博している。が、NISHIGORI(2001)で詳述したように、あくまでプレゼンテーション用の教材であり、1章で示したような「インタラクティブ」「編集・拡張」的な利用はできない。筆者<sup>5</sup>は、制作サイドに素材集としての廉価市販を提案してはいるが、今のところ実現可能性は低い。これは、写真や音声をばらばらの素材として利用するためには、従来とは異なる著作権が発生することや、素材が本来の趣旨と異なる目的で利用されかもしれないという危惧があるためではないかと推測している。今後も同様の提案をし続けるつもりではあるが、同時に、これとは別に、すぐに利用可能なものとして日本語教育用写真集の WEB での公開を開始した。日本語教育関係者が撮影したものなので、写真としての質には問題もあろうが、今後の進展でデータベースとして十分利用可能なものになるのではないかと考えている。

一つ一つの写真には、上記『日本語教育用写真パネルバンク』制作時のシソーラスを参考にしたキーワード(日本語・英語)がついており、WEB ブラウザでの検索が可能である。

米国パデュー大学にも同様の写真データベース<sup>6</sup>があり、現在連携をとって相互のデータベースの拡大を図っている。

### 4. 今後の展開と問題点

本サイトは2001年6月に公開されたばかりではあるが、各所の日本語教育関係者・学生、大学院生の協力により、短時間で思った以上のデータが集まり、アクセス数も期待以上となっている。今後もこのサイト運営を継続し資料の充実を図っていく。ただ、今後いくつかの点で改善・展開しなければならない問題がある。

第一に、日本語教育関係者のマルチメディア操作能力の向上である。1章で指摘したように、実際に日本語教育に従事する者が「インタラクティブ」「編集・拡張」的な利用ができないと本当のマルチメディア支援による外国語教育とは呼べまい。

第二に、海外との連携の充実である。現在日本語教育は海外の大学での拡大が目立

つ。学習者のニーズはあるのだが、教員不足に悩んでおり、筆者のもとにはマルチメディアを利用することで多数の学習者に対応し、問題が解決できないかという相談のメールが相当数来ている（中国・ロシア・ウズベキスタン・バングラデシュ等々）。幸い、こうした大学はコンピュータ設備の整っているところが多く、マルチメディア支援による日本語教育の有力な拠点となりうる。しかし、現在のネットワーク回線では、日本のサイトと海外との動画・音声のやりとりを高速で行うのは難しい。目下得策と考えられるのは、各大学に素材提供サイトのミラーサイトを置き、少なくとも大学の中とその周辺では高速通信を可能にすることではないかと思う。

これらの問題への対応の第一歩として、本サイトは現在、中国の復旦大学及び西安外国語大学との人と情報の交流を進めている。

第三の問題は、素材が拡大していった場合の検索の方法である。現在本サイトは「中級聴解」「擬態語」「自動詞・他動詞」「写真集」などのセクションに分かれており、これは今後拡大していく。各セクションの内部では「キーワード検索」「場面・文型・機能による検索」等を設定することは可能である。が、セクション間で検索を行う際には、内容もメディアも意味上の次元も異なるものの中から必要な素材を無理なく探る方法が必要となる。筆者のこの方面での知識は浅薄であるが、近い将来、いや現在すでに XML 等の援用による日本語教育・外国語教育のための新たな検索と発散的思考のツールが求められているのではないかと思う。（了）

#### 資料 日本語教育素材を公開している WEB サイト

【通し番号】 [ア]URL [イ]サイト名 [ウ]制作者 （順不同・敬称略）

- [1] [ア]<http://language.tiu.ac.jp/>[イ]日本語読解学習支援システム リーディング チュウ太[ウ]KAWAMURA Yoshiko, KITAMURA Tatsuya and HOBARA Rei."
- [2] [ア]<http://www2.ak.cradle.titech.ac.jp/Rise/HTML/mr006.htm>[イ]4 コマ漫画日本語教材[ウ]東京工業大学教育工学開発センター赤堀研究室
- [3] [ア]<http://www2s.biglobe.ne.jp/~k15/>[イ]ことばのマナー講座[ウ]いとう
- [4] [ア]<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/~mohso/kyozai98/kyouzai-98/index.html>[イ]日本語教育副教材[ウ]名古屋大学大学院日本語文化専攻 98 年度M1作成 監修：大曾美恵子挿し絵：金石拓男
- [5] [ア]<http://www.asahi-net.or.jp/~ft5k-ymd/learn.html>[イ]Learn Japanese[ウ]Katsumi YAMADA
- [6] [ア]<http://sp.cis.iwate-u.ac.jp/sp/lesson/j/indexj.html>[イ]岩手大学オンデマンド・ネットワーク型日本語音声教育システム[ウ]三輪研究室
- [7] [ア]<http://www.ajalt.org/kanmana/0102/084otoko.html>[イ]漢字で学ぶ日本語[ウ]国際日本語普及協会
- [8] [ア]<http://www.nuthatch.com/java/kanjicards/>[イ]Java Kanji Flashcards 500 [ウ]Nuthatch Graphics

- [9] [ア]<http://langue.hyper.chubu.ac.jp/ueda/reading/>[イ] 独読 (DokuDoku) ソフト [ウ] Chubu Univ. DokuDokuSoft
- [10] [ア]<http://web.mit.edu/fl1/www/languages/Japanese.html>[イ] Japanese program at MIT [ウ]Miyuki Hatano Cohen, Rika Ikei, Shigeru Miyagawa, Yoshimi Nagaya
- [11] [ア]<http://moon.f-edu.fukui-u.ac.jp/edu/>[イ]Kanji-Ruby 日本語読解支援システム [ウ]徳島大学工学部矢野研究室
- [12] [ア]<http://www.wlu.edu/%7Ekujie/>[イ]ケンイジケビッチの日本語版ホームページ [ウ]氏家研一
- [13] [ア]<http://www.sla.purdue.edu/fl1/JapanProj/JapanProj-j.html>[イ]パデュー大学における日本語プロジェクト [ウ] パデュー大学 FLL
- [14] [ア]<http://jin.jcic.or.jp/kidsweb/>[イ]KIDS WEB JAPAN [ウ]Japan Information Network
- [15] [ア]<http://www.ed.kagawa-u.ac.jp/%7Eenyamash/concept.html>[イ]日本人の一生すごろく [ウ]香川大学 山下直子
- [16] [ア]<http://www.basistech.com/rj/>[イ]READ JAPANESE [ウ]Basis Technology Corp.
- [17] [ア]<http://www.jaist.ac.jp/%7Etera/index.html>[イ]読解支援システム [ウ] 寺 朱美
- [18] [ア]<http://www.ryu.titech.ac.jp/system/count/home.html>[イ]Kanji-Counter [ウ]東京工業大学留学生センター 小島聡
- [19] [ア]<http://babel.uoregon.edu/CAJLS/assessment/sample.html>[イ]語彙チェッカー [ウ]東京国際大学 川村よし子
- [20] [ア]<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/~mohso/kyozai96/Lesson1-1R.html>[イ]日本語会話教材 1996 [ウ]名古屋大学大学院文学研究科日本語文化専攻日本語教育学講座
- [21] [ア]<http://diamond.intersec.tsukuba.ac.jp/~material/index.html>[イ]Non-Commercial Copyleft Japanese Material Site [ウ]International Student Center University of Tukuba
- [22] [ア]<http://www.kanjistep.com/en/online/kanji100/index.html>[イ]Kanji Step [ウ]日本語リソースセンター
- [23] [ア][http://bbs2.otd.co.jp/21795/bbs\\_plain](http://bbs2.otd.co.jp/21795/bbs_plain)[イ]人形で教える日本語 [ウ]荻野誠人
- [24] [ア]<http://sp.cis.iwate-u.ac.jp/sp/lesson/j/doc/teaching.html>[イ]information for nihongo teaching [ウ]岩手大学工学部 三輪譲二
- [25] [ア]<http://web.mit.edu/jpnet/index.html>[イ]JPNET (Japanese Language Culture Network) [ウ]JP NET and MIT
- [26] [ア]<http://members.aol.com/writejapan/katakana/writutor.htm>[イ]Japanese Writing Tutor [ウ]不明
- [27] [ア]<http://www.YesJapan.com/culture/culture2.mv>[イ]"Yes Japan com - speak read write Japanese" [ウ]Trombley Takenaka International
- [28] [ア]<http://www.iuj.ac.jp/jlp/hiragana.html>[イ]国際大学日本語プログラム
- [29] [ア]<http://www.japanese-online.com/LANGUAGE/index.htm>[イ]japanese - online.com [ウ] Pacific Software Publishing, Inc.
- [30] [ア]<http://www.orions.ad.jp/urls/index-jp.html>[イ]日産インターネット [ウ]
- [31] [ア]<http://www.kenjikojima.com/DoNihonGo.html>[イ]DoNihonGo-Fundamental Japanese Course [ウ] DoNihonGo
- [32] [ア]<http://www.genki-online.com/index.html>[イ]げんき [ウ]Bri Banno Yutaka Ohno Yoko Sakane Chikako Shinagawa "
- [33] [ア]<http://langue.hyper.chubu.ac.jp/ueda/reading/index.html>[イ]独読ソフト [ウ]中部大学
- [34] [ア]<http://www.wlu.edu/~kujie/nihonwoyomu.html>[イ]日本を読む 読み教材 [ウ]ワシントンアンドロリー大学 氏家研一
- [35] [ア]<http://www.wlu.edu/~kujie/gesturel.jap.html>[イ]ジェスチャー 読み教材 [ウ]ワシントンアンドロリー大学 氏家研一
- [36] [ア]<http://www.wlu.edu/~kujie/essay.html>[イ]エッセイ 読み教材 [ウ]ワシントンアンドロリー大学 氏

家研一

- [37] [ア]<http://www.wlu.edu/~kujie/yomimono.html>[イ]日本語中. 上級読み物[ウ]ワシントンアンドリー大学 氏家研一
- [38] [ア]<http://www.wlu.edu/~kujie/katakana.html>[イ]カタカナ練習用 静止画[ウ]ワシントンアンドリー大学 氏家研一
- [39] [ア]<http://www.wlu.edu/~kujie/imj.html>[イ]introduction to modern japanese 用の補助教材[ウ]ワシントンアンドリー大学 氏家研一
- [40] [ア]<http://jin.jcic.or.jp/puzzle/index.html>[イ]Puzzle Japan[ウ]
- [41] [ア]<http://www.tjf.or.jp/jp/indexj/indexj.htm>[イ][ウ]財団法人国際文化フォーラム
- [42] [ア]<http://www.tjf.or.jp/eng/de/deindex.htm>[イ]A day with Kentaro けんたろうくんのいちにち (日本の小学生の生活) [ウ]財団法人国際文化フォーラム
- [43] [ア]<http://www.tjf.or.jp/eng/ge/geindex.htm>[イ]Japanese culture and daily life 日本人の生活と文化[ウ]
- [44] [ア]<http://home2.highway.ne.jp/mym/index.htm>[イ]Kaoru Minato's NIHONGO LESSON[ウ]Minato Kaoru そうがく社
- [45] [ア]<http://ccnic15.kyoto-su.ac.jp/information/famous/index.html>[イ]現代人名辞典[ウ]Thomas Robb
- [46] [ア]<http://cc.matsuyama-u.ac.jp/~shiki/sm/sm.html>[イ]THE SHIKI INTERNET HAIKU SALON[ウ]
- [47] [ア]<http://www3.wind.ne.jp/gahoh/hypertext/hiragana.html>[イ]ひらがな movie[ウ]金井まさよし
- [48] [ア]<http://www3.wind.ne.jp/gahoh/hypertext/katakana.html>[イ]カタカナ movie[ウ]金井まさよし
- [49] [ア]<http://www3.wind.ne.jp/gahoh/hypertext/kanji.html>[イ]常用漢字画数[ウ]金井まさよし
- [50] [ア]<http://www.coara.or.jp/~ht/KANSAI/osaka.html>[イ]kansaiben[ウ]Hidetoshi Tokumaru
- [51] [ア]<http://www.geocities.co.jp/NeverLand/2002/frame.html>[イ]のだまパパのかきじゅんきょうしつ[ウ]
- [52] [ア]<http://s3.kcn-tv.ne.jp/users/teruyo/mokuji-kokugo.htm>[イ]Lee のきょうざいかん[ウ]
- [53] [ア]<http://www.iida.co.jp/~nogami/index.htm>[イ]もりの学校[ウ]
- [54] [ア]<http://kodomo.bunka.go.jp/kids/index.html>[イ]こどもジャパンミュージアム[ウ]文化庁
- [55] [ア]<http://webjapanese.com/wj/game/01/00.html>[イ]Shinkeisui jaku1[ウ]
- [56] [ア]<http://webjapanese.com/wj/game/02/00.html>[イ]Shinkeisui jaku2[ウ]
- [57] [ア]<http://hpcgil.nifty.com/nihongo/game/sagase.cgi>[イ]Takara sagasi[ウ]
- [58] [ア]<http://www.kyodo.co.jp/kikaku/dekigoto/010101.htm>[イ]共同通信ニュース[ウ]Web Japanese
- [59] [ア]<http://webjapanese.com/column/stock01/index.html>[イ]Reading Practice for Intermediate level students[ウ]Web Japanese Daily Column
- [60] [ア]<http://www.asahi-net.or.jp/~ft5k-ymd/learn1.html>[イ]カタカナの学習[ウ]
- [61] [ア]<http://www.asahi-net.or.jp/~ft5k-ymd/basic1.html>[イ]Basic Kanji[ウ]
- [62] [ア]<http://www.asahi-net.or.jp/~ft5k-ymd/learns.html>[イ]日本語の文と英語の文の対比[ウ]
- [63] [ア]<http://www.asahi-net.or.jp/~ft5k-ymd/Cpdf.html>[イ]英語の名前→カタカナ[ウ]
- [64] [ア]<http://www.tiu.ac.jp/~kaneniwa/shiken/quiz-index.html>[イ]能力試験のための文法クイズ[ウ]東京国際大学 金庭 久美子
- [65] [ア]<http://www.DL.ulis.ac.jp/oldtales/jp-index.html>[イ]むかしむかし・・・[ウ]Multilingual-HTML プロジェクト
- [66] [ア]<http://www.tiu.ac.jp/language/nihongo/jisyuu/kensaku/kensaku001.html>[イ]情報検索の練習をしよう[ウ]東京国際大学
- [67] [ア]<http://www.jwindow.net/OLD/KIDS/LIBRARY/MOMO/>[イ]The kid's window library Momotaro(The Peach Boy)[ウ]Japan Window Project by Stanford University and NTT
- [68] [ア]<http://www.jwindow.net/OLD/KIDS/LIBRARY/KORORI/>[イ]The kid's window library Onusubi Kororin(Tumbling Rice Balls)[ウ]Japan Window Project by Stanford University and NTT  
Last update: Fri Mar 1 16:30:16 US/Pacific 1996



- [69] [ア][http://www.mahoroba.ne.jp/~gonbe007/hog/shouka/00\\_songs.html](http://www.mahoroba.ne.jp/~gonbe007/hog/shouka/00_songs.html)[イ]“新しい歌、懐かしい歌”[ウ]Japan Window Project by Stanford University and NTT
- [70] [ア]<http://member.nifty.ne.jp/YHL00515/members.htm>[イ]四字熟語問題集[ウ] 現代四字熟語勉強会
- [71] [ア][http://www.jwindow.net/OLD/KIDS/LIBRARY/DICT/kids\\_dict\\_animals.html](http://www.jwindow.net/OLD/KIDS/LIBRARY/DICT/kids_dict_animals.html)  
[イ]The Kid's Window Library (Picture Dictionary)[ウ]Japan Window Project by Stanford University and NTT
- [72] [ア][http://www.jwindow.net/OLD/KIDS/SCHOOL/LANG/kids\\_language.html](http://www.jwindow.net/OLD/KIDS/SCHOOL/LANG/kids_language.html)[イ]The Kid's window School (language Class) Let's learn Nihongo. [ウ]Japan Window Project by Stanford University and NTT
- [73] [ア]<http://www2j.biglobe.ne.jp/~minwa/index.htm>[イ]岡山の民話[ウ]Kowata Noriko
- [74] [ア]<http://contest.thinkquest.gr.jp/tqj1999/20001/>[イ]WELCOME TO THE LANGUAGE[ウ]Hitomi Saigusa/Miyuki Somada/Kyoko Makiyama
- [75] [ア]<http://www.tcp-ip.or.jp/~kazm-pic/>[イ]Kazm-Pictures for language learning[ウ]Kazumi Yagi Tokyo Japanese Language CenterLangprac Business Japanese School
- [76] [ア]<http://www.coscom.co.jp/class/kana/e-index.html>[イ]Study Japanese On The Web - Hiragana&Katakana[ウ]“CosCom Language Service Inc.Tokyo Japan”
- [77] [ア]<http://www.coscom.co.jp/class/230verb/230vb/e-index.html>[イ]Study Japanese On The Web - Verbs[ウ]“CosCom Language Service Inc.Tokyo Japan”
- [78] [ア]<http://www3.wind.ne.jp/gahoh/homej.html>[イ]gahoh 雅芳[ウ]masayoshi kanai
- [79] [ア]<http://www.kt.rim.or.jp/~val/>[イ]Japanese VAL BALLOON BEGINNER Level 1 -50 sounds table [ウ] VAL
- [80] [ア]<http://www.kt.rim.or.jp/~val/grammar.html>[イ]Japanese VAL BALLOON - BEGINNER Level 2 Grammar[ウ]VAL
- [81] [ア]<http://www.kt.rim.or.jp/~val/aiueo.html>[イ]Japanese VAL BALLOON- BEGINNER Level 3 - Daily Conversation [ウ]VAL
- [82] [ア]<http://www.kt.rim.or.jp/~val/travel.html>[イ]Japanese VAL BALLOON Intermediate Level 1. VAL'S WARPING WORLD TRAVEL[ウ] VAL
- [83] [ア]<http://www.kt.rim.or.jp/~val/seasevent.html>[イ]Japanese VAL BALLOON Intermediate Level 2. Japanese Seasonal Event[ウ] VAL
- [84] [ア]<http://home.ntt.com/japan/japanese/pronun.html>[イ]Travelers' Japanese with Voice[ウ]Tanaka Toshihiro
- [85] [ア]<http://www.starfestival.com/tanabata/site05/index.html>[イ]prof. Miyagawas Site for Japanese Study TANABATA KimonoShop[ウ]StarFestival.inc.
- [86] [ア]<http://www.starfestival.com/tanabata/site06/index.html>[イ]prof. Miyagawas Site for Japanese Study TANABATA Fruit Shop[ウ]StarFestival.inc.
- [87] [ア]<http://www.starfestival.com/tanabata/site08/index.html>[イ]prof. Miyagawas Site for Japanese Study TANABATATakaguchi Workshop[ウ]StarFestival.inc.
- [88] [ア]<http://www.starfestival.com/tanabata/site17/index.html>[イ]prof. Miyagawas Site for Japanese Study TANABATAHigh School[ウ]StarFestival.inc.
- [89] [ア]<http://www2.dokkyo.ac.jp/~japan/japanese/sub6.htm>[イ]The Image of Japan 日本語学習 会社とサラリーマン[ウ]“獨協大学、東京理科大学、イリノイ大学”
- [90] [ア]<http://www2.dokkyo.ac.jp/~japan/japanese/sub2.htm>[イ]日本語学習 日本の宗教[ウ]“獨協大学、東京理科大学、イリノイ大学”
- [91] [ア]<http://www2.dokkyo.ac.jp/~japan/japanese/sub3.htm>[イ]日本語学習 自然観[ウ]“獨協大学、東京理科大学、イリノイ大学”
- [92] [ア]<http://www2.dokkyo.ac.jp/~japan/japanese/sub4.htm>[イ]日本語学習 日本人の食生活[ウ]“獨協大学、東京理科大学、イリノイ大学”

- 【93】 [ア]<http://www2.dokkyo.ac.jp/~japan/japanese/sub5.htm> [イ]日本語学習 日本の年中行事 [ウ]“獨協大学、東京理科大学、イリノイ大学”
- 【94】 [ア]<http://www.japanlink.co.jp/ka/index.html> [イ]日英対訳日本文化キーワード事典 [ウ]
- 【95】 [ア]<http://www.japanlink.co.jp/ka/jcplfr.htm> [イ]英和対訳日本文化キーワード [ウ]
- 【96】 [ア]<http://www1.beam.ne.jp/kuchikomi/manner/manner.html> [イ]マナー教えて(くちコミくらぶ) [ウ](有)ジョブ
- 【97】 [ア]<http://nihongo.intl.chubu.ac.jp/wwkanji2k/wwkanji2056.html> [イ]WWKanji [ウ]小森早江子

<sup>1</sup>本研究は以下の助成を受けた。平成 12-13 年度文部科学省科学研究費（基盤研究(B)(1)）「外国語教育のための Web サーバー／モバイル技術を活用した教育環境の基礎的研究」（研究代表者：大岩元）

<sup>2</sup> 国際交流基金 WEB ページによる <http://www.jpf.go.jp/j/index.html>

<sup>3</sup> 日本国際教育協会 WEB ページによる <http://www.aiej.or.jp/index1.html>

<sup>4</sup> 同教材の制作には筆者も関わったが、今回の公開は言語文化研究所の厚意によるものである。記して感謝する。なお同教材は初級学習者の混乱をさけるため、動詞主がいて直接目的語がある行為はすべて他動詞としており、視点等の要素を考慮した使い分けは含まれていない。

<sup>5</sup> 筆者はこの教材の制作委員であった。

<sup>6</sup> URL は、<http://tell.fl.purdue.edu/j/photos/> 同大の畑佐一味氏が中心になっている。

## 引用文献

- NISHIGORI, Jiro (2001) 'The Evolution of a Certain Set of Teaching Materials from Paper Prints to Customizable Digital Data' 『日本語研究』 東京都立大学国語学研究室, 51-68
- 荒木博之(1994) 『日本語が見えると英語も見える』 中公新書
- 浅野鶴子(1982) 「擬音語・擬態語」 『日本語教育事典』 大修館書店, 301-302
- 奥津敬一郎(1982) 「語の成り立ち」 『日本語教育事典』 大修館書店, 282-285
- 言語文化研究所(1999) CD-ROM 教材 『日本語玉手箱』
- 国際交流基金・日本国際教育協会(1994) 『日本語能力試験-出題基準』
- 西郡仁朗(1999) 「マルチメディアによる留学生の日本語学習支援」 『人文学報』 東京都立大学人文学部, 1-20
- 西郡仁朗(2001) 「世界の言語研究所-アイオワ大学 FLARE プログラム」 『日本語科学』 国立国語研究所, 9, 165-167

(にしごおり じろう・東京都立大学)